

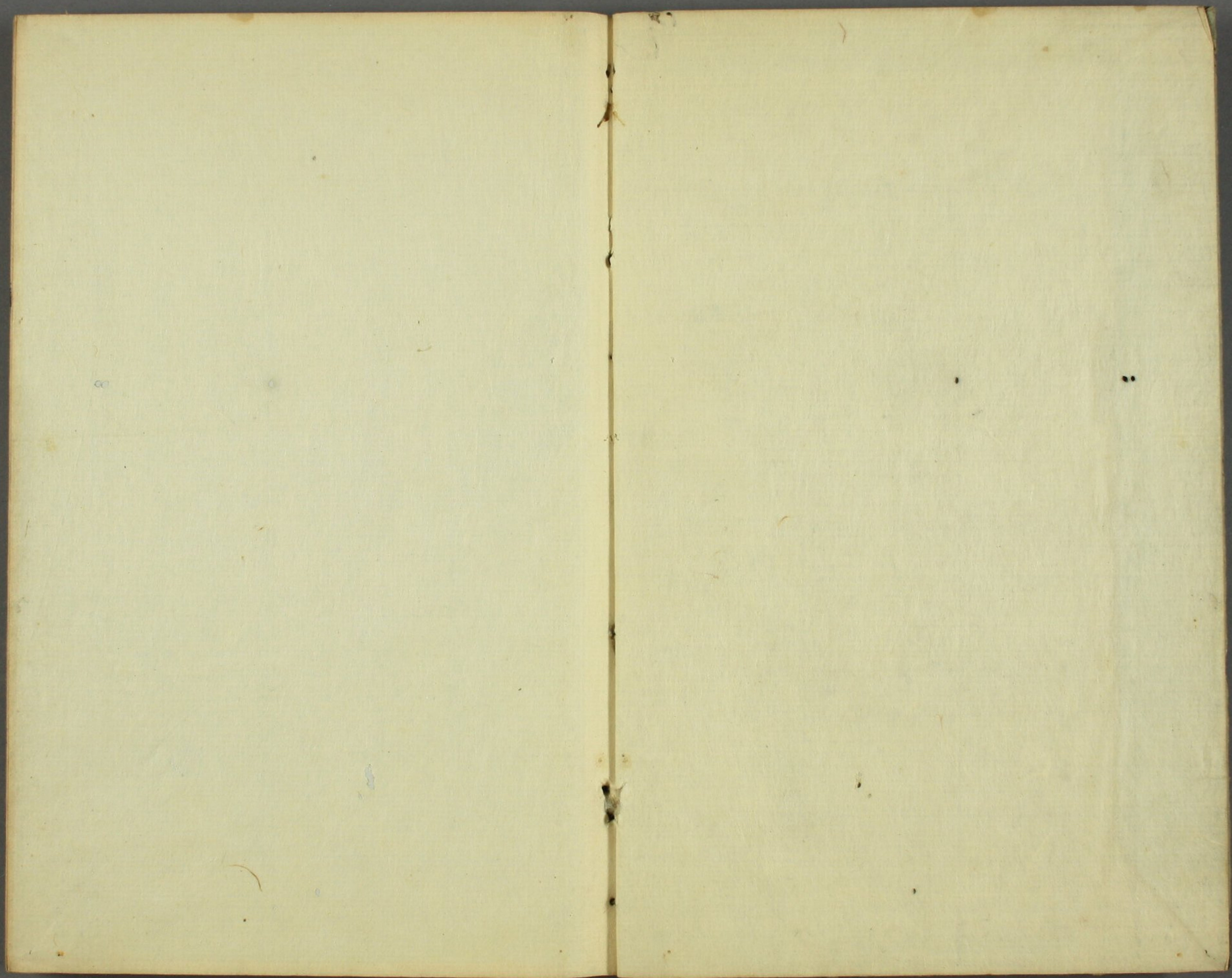


赤冊子

中村俊定文庫  
文庫 18  
525  
1











三冊子序

天地人乃三才なり和氣は三才此名を以て  
 連綿と三物の後以てもめりて地歴代のた免し  
 されは三都ハいふもさうわいといふる鄙乃きさ  
 少と家三ウ何進ハ風人那きとつるなりこれハ  
 此三才命も伊賀の土著也随時絶ふはと  
 翁滅後二十年ハいさ〜り辰半二十年ハ忘れ  
 ぬの事名のとく後二十年ハ露の事免すね  
 ちう比きぬくけしをほる山ハまはれくおのり  
 しく函底りうく辰のこり〜道の有る





あつはるるれハ今年梓よりとむるよりと  
らりし文の老なられハ五車韶瑞乃不備述も  
那く却隆の後中ふとあつはるるれハ日又暁の  
望りぬりもあつ筆をとるにいととむるるれハ  
三伏の夏すれ初秋の涼一歩比おむむこ  
而已をかくあつるのあつるるる

あつはるるる

半化房

蘭更

あつはるるる

師の風雅千代万代不易者一時乃変化あまこの二にあり  
まか一之その一といふハ風雅の誠之不易とあつこれハ実を知れる  
にあつはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
誅よりくあつるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
化あま又新古もわつるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
あつはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
はるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
次是又押移るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
てその誠とせめはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる



化と智と申さるの如く唯人はやうりて妙のこせむ  
 とのちその地は是と云ふかこく一歩自然を言理之め未  
 いくも変万化止るとも謀の変化を皆師乃能諧之か至  
 小も古人の能と云ふむるのみふれ四時乃押移れくおあつた  
 ある皆かくれと一と云ふ師末初の執り門人以後の風  
 雅と云ふ師の白此きの教よ出て百變百化を志う様とも  
 我の悦去等々の之と云ふを其の三つ中に入しこ一こ  
 ともふをよと一はあおりのたりやれは能諧いまは依に  
 成と成れとも云ふれ一は夜一こ言くあつたをこと  
 至て俗なり師の一と云ふを其の三つ中に入しこ一こ

と至て今あるは能諧は師の一と云ふは考風雅よつたの  
 は思ふ心乃也おとわりて白安定るとのなるははれお身  
 ありて子細ふし心乃いろりりかうされはかかに詞と  
 せむむ是を考は謀を勤る心乃俗之謀を勤るとはあつた風  
 雅よ古人の心と探るをくハ師の心よく知へしと云ふを  
 ちうは積りたるとに謀の道かしそれ心を知りハ師の能  
 の説を返ひよく又知ては家心の節押進し後手新て自  
 得するやうにせあうのを説を勤ると云ふ一師のおりか節  
 は我れをひとつはなされしして私言は師れ乃をよろこび  
 く我れ門とわらうらうはわしと私の心をめまらあま



門人より己を押し出さるるに示す所のハ招のハ招は招へ竹のハ  
 竹は招へと師の詞のありしも私をさるとは招れよといふ事  
 この習ふといふ示とおのうまにござりて終は習はさばる習ふと  
 云ふ物は入るその微の歌く情感も也句となる示したと  
 抱あはは云出さるもそのまはより自然はあつた情はあつたハ  
 物と我ニツまなりて其情誅はいたは私さのなるは他さ  
 唯師の心をまりぬくさられハそのまは家心の句はとなり  
 稀く詮發せられハ探るに又私をあらをんさ穿穿せむ  
 るもの志もくも私をあらをんさ穿穿せむ  
 けくま一とをさ用ののりて名を地うらと云風友の中

の名目と其功若くは病あり師は詞小も他諧ハ之尺の事には  
 せよ初心の句こそたのりしれあつたひく云ひわかれしと  
 皆功若くは病と示されし之まは入る氣をあらふと云はれあり  
 氣先をころせハ句氣まのり先師も他諧ハ氣よれをてま  
 一とをさ相極あはく拍子をそこなるもいり業をそこ  
 ひに語をゆへ又ある付ハ氣をた師して句をあらは  
 こととりのれ氣をまうして喜の歡之門人功若くはあり  
 てたれ能くせん私を立く分別門は口を閉く業  
 草外よりおのう氣をあらは心のあらうる示す多事  
 他諧好する人より外藝は連したる人と云く他諧牙



入るも師のきりある能書小もさるる師のいさ  
 学ふやいつはまき席に坐て又書と家と乃又發しん  
 ぞあり速よ云出くまよ至て迷ふ念わし又書引おろ  
 せし取反故ことたひしく示さるる詞も何り或時ハ大本例  
 是こし一簿本に切込言ぬ西凡切らぬ一梨子くおつま  
 三十六句皆やり句形といろくませ先られ侍るも皆功志乃  
 私書と云ひやうせんとの詞之師の心をよく執りし  
 つひは勤てふにのそとて業しと語さるるなり業する  
 とかよふて出る節うあるへうは勤て心の位とけり  
 成るその勤るやいふや句と形へし一氣とこ語してち

ら精せは刻精るら細くならりてハ費之ういと節の迷ふる  
 之のゆりく精してハ侍る大師の之をゆくこの丈夫心ふんせ  
 ちより有まし皆いきて精するに歌はる節なりし  
 新ハハ能諧のまこる兒ハ毫なくて未立とのぬりする  
 ら能せらる亡師当は新よやせりハも新との白ひこそ其端  
 と見えぬ人を悦て我も人もせめられし一亦之せめて流り  
 せよまハ新にかし一新ハ忠にせむるゆへは一歩月然  
 ますむ地より歌ふ之名月ハ禁れ書や回れくとりと云  
 ハ海不易なり花うと見て綿留と阿ましハ新こ  
 師の白乳坤の愛ハ風雅のまよことより新なるものよ不



変此染め之動りりのハ変し時とてと先されいそは此止  
 とのふハ見とめはとせざる之花落葉の散れもその中よ  
 して又と先せとめされハかきふるこも一その後とるおとす  
 消て消ふ一又句作りは原の詞をとおのえたるひるをいまこふ  
 よきえさる中にひとむ一又越句を句のありは振出後と  
 づふとありはその境に入とあはせめさばうらにきてあを  
 完る者之句他はなるとまると何と内成つひに勤ておよ  
 無き携ハそのら此いろ句と形の内とつ補勤さるをのいな  
 らはるあり私意よくけてまはこ

原のつく体格ハ是優美にして一曲有ハ上取之又たくとを  
 殆しき物よとるハその次の中取よ一と多ハ地句之原の句  
 とあきてそのより取をいさう歌ま

何の本の花とはあはれ句ひうね

は句ハ本歌之西行何ものおり一傳まふとあはれもは  
 ちたはの波こほくと何とを併みとてさむせる句あま一

色明のこナ日よらう一とちれ者

此句も兼好有とて人よあはれて別の句とや見そくたち  
 きぬかの月とある本歌を余情あはれ此作なる一

言水よ早も旅路や岩れう

は句ハ小町う石の上と旅路をまはれいとさむ一若乃衣



と歌よるはあんと云ふをきての句なるべし

かゝるむねなるやみ人のあやめを

け句とほらき次なるや又月のあや先草とらふ言の句  
をきての句なるべし

花のくこくとよみ給ひるなきこと

いづこ軒満寺のまゝとよみ給りて新詠と

浸せる夕まゝいと涼しうれは

夕るれやさくらに涼む旅の毒

け句は古きをあまゝしてそふをえせる他あるべし

かゝるむねなるやみ人のあやめを

此句はさせるゆもあられも白雪横とらふ奇文を味合はし  
一とひハ声や横こふとも一とまの紅は横たふやも句他は人も  
刺さきて後江の字抜く水の上とらふ詠けて句れ白ひまら  
しれも定る水光接天白雪横江の横句眼なるべし

け句あはれ此月かたむた山のかたむたはとらふ詠の

詠もたたくてあぬ言あまたひさるべし

教皇あはれ詠められ杜敷う早め此詠あはれ小夜中

山とてかたらく

一とにみまらしく詠あはれ身を茶此煙

け句古人の詞をあまゝかして風情を照はし初は言上眠る人



こして秋夜月茶の煙と香をつひるに寐てと初ふ字  
をくは後又句に拍子きてよかすはそ月を茶の煙と出され

ちる茶や香もおとほく秋の聲

虫の音茶の煙よりうて詞を引ひられ句あそ

粽漬ふ斤手にさうや歌かこ

は句おかすは此辨とと去来集撰の対先師のより云送  
られハおろりの海も一集ハあそこのこと送るこ

は埃もひりやわくもこれのや

かこつび王角ゆつはけとは戸の石

は句ハ次の巻乃詞をおとよしての句なり

親香のいさう名なり川と水の雲

は句のり或集ふキ角云種ハ上野う海子とすハあ乃  
也ハ此吟と尤病起の眺望成ハ一聯二句の格之句をな  
句ときとあそこもあそ

朝風や雲を寝おろを門の垣

庭うらて秋又せよや坊り妻

枯枝よ鳥のこほりり 秋の聲

は句も字録り之お修り此句作の味ハその埃よとされ  
ハいさうとこの人ハ初集の山おろよとそ文字録り  
のりなと云出ておろりかたを工まて味あハと



初雪ようはき此皮の装つて

此夕山中に子ともと遊びてとおおあるに初雪の舞こそ  
まきける白雪他者よより一先ハ実体之様ある一

昔季作のくれハ風雅も原書

は白風雅も原書と俗とひとつよ云侍る是先師の心  
人の句は花やけてと云白雪こそお蝶の舞やう一とらふ句  
ありさくいひくまふ俗之味一

早稲の香やまけ入ちハありそ海

一おのハ時雨う雪う雪此不二

この句師のいづくも大まよ入る句をいふ時をそのくれある

初雪名ある人かたは風よ折てくんせ川とらふ川よ  
ありおむと云句阿りたて佳句こそもま信をまうかして  
之者そもそのんきひをる一又不二の句も山の雲そ  
の氣ふとなうてハ美山とひとつよは

梅名菜すり子此宿のと詠汁

この句師のいづくたてまてる句にあつてはゆと云くより  
一と詠をそむりよる句かこれとくこの句ハ又せんハ  
と東武はあむく人よ對一そのれは梅名菜と興一  
まり子の宿おといひと風一てあする一解なり

二日ふもぬうりハ雪一花の雲



この句ハ元日ひる満てしめてもちろひもつゝ一とをとおふ  
あまは句此時師の曰ふ秋氣きひらき秋向をけり  
はくも系ハ二日ふいとつれを山もといはふるこふとつひて  
ハあゆり平目よ當りてつふくいやと之其角 たびりよ  
あふうの山といふもあまんとふをあふといはふる之存撰  
の人ハつふこの秋あふ一

せりやぢや縁痛の田井れ薄氷

この句師のいふくた、おひやりこる句ことと芥やさや  
名取たうつゝ丸あひやりこるおねへ

は子良子の一お申一梅の華

此句もつゝとせに詣て老師梅のそをそつゝ一にふる  
の彼れあふりに漸一本を花梅ありそのかにもそつゝ  
と社人の告るをを句こしてと何れ一と師のいふ  
むしよりけつゝ連作の連人多く句をそむゝ終まは  
梅のことをあふと候ハ一く笑あふる風雅の心けあり  
はるそつゝををひきしハやまかぬ所

とれむは鏡も清一雪の光

梅こひて卯のふおやなごが

けあれ句ハ換回造言此時の嘘とこれむはとちくそふ  
をやまぐち歌一と位をよくする梅ハ雪光大顔和尙



遷化の時の句こそその人を梅はけして夜は卯の花おせと  
のふく物はよりてあふらとめまそそのまれば又位をぬ

稲妻をよみたるやこれ紙燭耶

この句師のいづく門人この乃又あや一さ所をねるものよ  
いひてきほ句こそふりその何や一紙をいりんとおわかくれ  
こゝ一万ふきひくそふ所をぬけへ

旅人とつら名呼ま入初一丸

け句を師衣江は旅出の日は此心といさま一紙を句乃  
ゆりまふりも一てよまれん初一丸とハなるといふ海  
きを歌ま所信のうをあまよ一て世のこく章さ一

門人は送られ一風情あるものこの夜一さ他さ  
よ物る原の心も亦と味飽一

何よけ師走の市なりけり馬

け句師のいづく又文字れいさここよ有とあま

やふまは正月ハ梅のむさうり

この句ハやとくきほの初夏又正月に梅咲くことといひ  
ふくそ卯月おほほとくきほの声いと歌ふ心をあま一とて

培鯛の齒くきもさ一奥北棚

け句師のいづく心きいとは句よなうともの自積あたること  
後念を生て出らん初鱧といふとそ心のちの折人のまらぬ



西之又いづく様のと白く暮の月とふハま角く培鯛の函  
くまハ家老のトを奥の棚とた言ふるも自白とらり  
喜立や新年ゆら米み神

け句師の曰似合しやとほし先又文字ありに惜るく  
とらり之後ハ喜立やとありて短冊もも抄り傳るく

とや成地分監るをす後うす  
いさくらハ音んまころふところまで

本加じの身ハ竹舟は似るるふ  
山語来て何やう床しをこれき

家ハとふ杖よ公發のそり糸り

灌佛や皺手合る珠数乃音

此那分そし先ハ聖分してと二字餘り之音んそしめら  
いさ申くと又文字を本枯初ハ狂句本あらしのと傳て  
きりきみき草ハ初ハ何とふく何やう床しとて家ハとら  
一家これとて灌仏も初ハ初らん今やとす一後ふ一  
うられ傳らうけ狂歌あふし皆原の心うられ之味ふ一  
猿の床小と入るやきりくは

木の白自筆にま初ハ床よ来て軒又今やきりくは  
とりふ白ありなりかしられ傳らう

草針て若くるはや花のそれ



は句始ハ初とす凡やとるはやとるは及ぶる

風を也志と改は棟一庭の秋

此句あるは此庭を足すの句は風吹とも一ひを風を也  
ともそのなく吐いていそく色といふ字もさるやうなれと  
色色といふ中に先まへしと

こんの中にくらうらうらあふ

ふの句く先ハ恰おねと又文字を再作して後えんや  
にあり侍ると

鞍つはよ小坊ま乃ちや大根引

は句原のいそく此や大根引と小坊ま此よく目まきりま  
句作ありとね季

六月や峯よ去とく阿比山

この句前折舎の句は去並嵐山といふ句作あり  
処とつり

川風やうす折若る夕涼

は句まみのつひ折少らねて侍ると

雲雀鳴中の拍子や籠子此季

此句ひまりの鳴つける中又籠子おく鳴入るうき  
をいひて甚深なる味をとんといろくしてをを

かきさけも空也の瘦もきの肉



この句原のいづくの味を云とらんと数日待つこと  
あはるといふおぼる句と又え侍るこ

蛇ふあときけいおとあしー雑子此家

此の句原のいづくの味を云とらんといふおぼる句と又え侍るこ  
いふあときけいおとあしー雑子此家

本のいづくの味も繪とさく哉

此の句此時原のいづくの味を云とらんといふおぼる句と又え侍るこ  
を云とらんといふ

たう聲そあざは餅負ふ牛此年

は句いづくの味も繪とさく哉

七夕や秋を定まらばいづくの味

は句あはるといふおぼる句と又え侍るこ  
いづくの味も繪とさく哉

又六乃かたはらふきー石の上

かたはらふきー石の上

は句あはるといふおぼる句と又え侍るこ  
いづくの味も繪とさく哉

明やのや白真おきこ一寸

この句あはるといふおぼる句と又え侍るこ  
いづくの味も繪とさく哉



やうやくや猿まきや猿の面  
は案且隙のいそく人回し処は止る月一処まよしく  
落入るるを悔ふいひ控ふるをとり

牛初登る蚊のあひつき沙思ふ

は句蚊の声とわい秋の風とあへてはあつて自筆  
は沙暑く那とあへて

梅う香よつゆと日此歩る山後我

おまろけし小那きう上の腕の腸

は二句ある他去る梅ハ條を腕のりてハ沙暑く之を二作の  
越えといふんと門人のハハ師むとこころれ侍るとこ

ひやくと壁をぬきて居る藤我

是も沙暑く水の門人のハ作写とこ

坂風の吹とも青く栗のいり

は句いり此青をおうとて句よあくる之吹とも青くと云  
西も句とハあつて垂つたりと云

言ふくく我を徒まえる夜思

此句くめハなるやかく我を徒まえる心くおとを後思ふ

全屏は松のゆひやあやかり

は句くく老る山を徒まえる冬籠り之後思ふ

秋風や桐は動るはくこのお



は句梧うこく秋の終りや昔の事とくくめ六廿八侍る  
後ありて此秋風之

園庭と川てあふ人の後むき

は句集ともうらさきとみ又字して下れ又又字後むき  
せふつきとむ改めるこの句盤弁の後むき此像の替之

窓形より字のこさや 草

此句閑明をくやむとあふありけく免ハ登る藤乃  
甚やと申の七あり

一とせよつなつまうくまの葉哉

は句それ喜久通はえ侍るその後重よこら侍れハ

昨の目まはさうくさひ侍る何申りよかくはうら持と

旅懐

は秋ハ侍てきくさる雲よる

此句難波あての句は日船ありけよこ免て下れ又又  
字よすく此携をさうれく

明月や産まうらうくま鳥屋

此句湖水の名月之名月や児達双ふ堂の縁とくく  
いささうらうら名月や海はむくハ七小町にもあうら  
産まうらうらさうらあうら

蘭の香や蝶の翅より葉の



は句ハある茶店の片もくは道やまひひてたきみあり  
 一を老翁を兄初り侍るや月は信一家女料紙持出  
 句を影ふそ女の内も我は家の托女あり一或今にあ  
 一此業となり侍る之先のあや一も若翁といふ托女を毒  
 一其は難波の宗周は奴まわつりあふをえうけて句を  
 秘すひ請ふるとは例おし一たすまてのひやう志きりり  
 此そ侍れはの形もわつてかの難波の老人の句は昔れ業  
 のおつるの娘おの親とつらめ句をあまし一この句を  
 侍るとのおうつりこそ名をてうといひかくいひ侍ると老  
 人の例は侍せて去捨つりはのとも侍れは形一とたのこり

秋もこやちつと雨は月の形

は句ち一免の時をかちよつくと秋も時毎哉と句作り有  
 いうまおりのひ陰ひ侍るやいろく句作り一とんんん  
 及ぬの等すちと終る月の形と自筆のおみも詩一をれ侍  
 鳥よ似ぬ鳥句と出よとつ様  
 は句ち下れさうつろくさむく侍りて風と初とつよ  
 中王是初の字は位あり一やうと宛る  
 影あよよと釋て涼一凡の泥

此句ち凡の土と一免あり涼一きといふは侍る所錢  
 又く匠といひ一とれ侍る



人あやほ道くする秋のうれ  
ほさやめ人あに跡のき

ほ二句いつれうと人あをいひ作り後行人あうらあ  
よるり所思とふ影をつきをゆり

清澄や浪はちり返す松葉

此うゝ免ハ大井川浪はちり返す一夜の月とあその女うあ  
ての白葉はちるにまぢりうらうとそ那うくられ作るこ

桐の木に鶯あくなる唄の肉

これ句いつあ作るやとそうのうれに何と申う一さまあうら  
さあう一答へ作りいさううあああまであさううあうと

旅は病て憂ハ枯野をうけゆる

此句病中の吐みて句れ作り之程うけゆる憂うとつあ作  
あいまあひ作りやと人あもいひう後い句に空るとは枯野  
花よま角うかけるかき野を過る憂うともせもやとる  
と河を後日記は程うけゆると何り

朝とさ浅語書志波の行ふ

は句と季あう一昨の朝ふもああれを難の句にもあり  
きう一季とさあいせあれを用う十七文字にハいうう  
さ一述わうとさうも作るさ乃らよてこの句も何り  
うら程杖つき坂の句ま



門人の句に元日や家中の礼ハ星月夜ふまきた門  
松又星月夜と斗まきる句之味あへへとく

日松風又新酒と他山語哉とわふ句を山語を夜まに  
まへへとつりその秋の道乃度りに集なるとにみ出さし時を  
ちへ先の山語あへへとく

日花鳥の雲又意くやらのわりとふ句を人のさるふ句  
さかへへとくまゆる句よかへ侍れハ句あへへかへへとく  
原の白うれわりれ句にして志るへへとくまのさるを何と  
やへかへへとくまきと宜と居け歌のさハあるさへかへへは  
もも小男麻のつらね居初居まいつへ君うたすくはえんとく

もその歌くまへへこれともあへれまきとふひあへへとく  
となり

日松あハわりくまへへ玉の妻とふ句をこれハ玉の字分別  
ありかへへも無念なるりさとして結句のひ歌へへる句とつり  
日ぬしやまこれぬつり時ぬしとてとらふあり先ハ初又理  
居えなへへとく後詠は月とハいうと云ハ宜とく

日時なるか松旅客と笠の塔あへんとらふ句あり初の初  
るこり松とと斗まへへとく

日雪よ橋又松のゆきとらふ句あり下のみ文字原乃  
手解よくさへ初るハとこ口ツ又雪のそ詠りぬふえんら



ともなふなりと

日暮風や雲の中なり水の音とつゝあり京氣此句なり  
京氣ハ大予の物之連なり京曲といひつゝ一の宗近なり  
はくしと一代一五句より初めまゝなりはなはしき一なり  
能ハ連なりちとハつゝは熱る京氣の句ハゆゑひやきとて  
はよくいふめ有んは是風京曲なりことてかけらふいふや花  
の系にとつゝ揃へて送れはるととて又京曲ハ又揃へ  
屬すと定家ハもの多しとて寂蓮の意而定家ハのやうに  
納代本そ又揃へたのちと何る能也とあり

原の曰能借之連なりとつゝハよく付せし字意之ん教傳也  
乃新語おもあ句にふのかよハさるハたむなり一人のつゝ  
くさう<sup>て</sup>記てたつひみ<sup>る</sup>なりと何る能也又付のや  
ハあま万化中とつゝもせんはる而共傳とあひなり京氣は  
三ノ能り傳るより一原のつゝもも又ある時原の詞は揃へ  
さゆくもとつゝも世上二三辨はる今もあふ十二辨も  
んく傳る之物もまゐる人や此後うに究め傳るやうに人に  
あつらんちと揃ハまゐるものつゝすともやこ傳る  
原の白付とつゝあハ白管傳秘り推量なりと形なり起  
る亦とつゝ通せされハ及んて起るなり原の句をゆくも  
のあつまるとつゝ



あはくして来る海なり野分ふら

を移れかゝらをあらる粟の穂

きり羽もうつろりぬあし

一喚風の木の葉をりりまふ

は揚二ハあは付一体の句に吾等の句ハ雅分治しくあは

おさゆりく後をつら句を静なる体と揚とは木の葉を

はら句のあをひらく揚又一つは葉をれし油を

後乃ききれりこと又返るあ句のあをひらくをひらく

ら〜れ句

空菊の隣もありやつけ大根

冬〜〜〜〜〜小窓乃 煉

は揚日一家の事をあは付る之内と外の揚子之煉の字有る

きり〜〜〜〜〜田植

あ〜〜〜〜〜あはの又月雨

は揚名取をひら付る句にハあはと揚を越る風流を句と

秋の音の先〜〜〜〜〜

萩〜〜〜〜〜萩又萩

は揚あはれ乃葉をあは付る句なり

葉程干す葉の増や夕涼

常あはりあはらさいの



は獨る句此位をえあめてもふかく付る句之日お裁  
まあさりの似合あおと奇

あおさうた旅寐よ牧屋を忘せり

古人うやうれ秋の末かぶり

は獨風のさひし秋夜古くさうの夜あるとつふ句  
え付心ハその旅寐ふさく思ふ心さひく付る句こ

おくそこもねくて冬木の梢か

小春よ首の動くこのむし

この獨あさうねる日れその中なりわさりの貌よ密  
悦のいろを思ふるさうさきを付る句こ

市中ハ袖の白ひや夜の月

あつしとと門くれさう

は獨白ひや夜の月とを思ひて極異を歌して  
見込の心を思ふ

いほくの意もまきさうさの字

うたれて蝶乃目をさるしぬる

此獨ちほきさうハしとふ心乃白にさうに蝶のち  
まれさう思ひ入るりたを付る句こ

おくや夏戸よさうの萩の声

さうにさうあうぬねら



この揺るむの位を思ひあめて自よ詠へくもあけ付る言

緑の草履乃ちあきある春

石ゆへにおそね小館をあり分て

け句氣を付とけ一句麻友の巻の付へうらあめると

いふよある

夕良おましく美居ひーる

栴の本よせと字はハかに痛ん

一句付とも古代あしてま自ひ美系ふとの付あり

世の繁よ徑埋く面白よ

路うらなると門の半付

これ一句強者の付へあ句けうきさにそふとあせむ  
意新とあり

龜山やあししの山やこの山や

るよと碎くかえれつ

あ句のやの字書きにもに碎てそと詠ふる新を付

歌は一句風狂人の付へ

野 松よ蝶の啼りある春

歩けあ持もあれ人と囀して

あ句れあきあるあまといひをねしなるひきさに勢ひと

あひ入くうち急く乃け人のゆりふかく付る自ひ匠



青天より有明月の影ほけ

湖水の秋のは良此より

あふれ初より雪より成起り湖水の秋は良此初

霜と清く冷しく大なる風景を寄

僧やきく寺より歸る

猿川の猿と世を經る秋の月

六の二句よりなる楮之人の五拍を一句として世の

ありきはと付とけ

こそくと草鞋を傳る身夜は

蚤をゆひよ起るる秋

こそくととみ初は秋の文を淋くば拍を足込人麻

を敷たるまるものとさひなて妹ふと麻袋とて起

るきは別人を立く足込心を二句に居に歌まを

秋若たぐいとくも持のう

針の影跡しき申待

あふれ並の字の気味よせと麻袋雨衛一居此住居

まの五斤付て掃清めする所と足込よりしき申待

の針を付するの字ひらりあり

ほよらけたる 歌あまらん

双六の目を歌まそくれり



氣味の匂く澄日双去よ名まら情いくほよとけぬく  
三人の氣味を付する人

そつと配けをほのろ中

寐亦よきれも寐て居ぬ音れ月

お句乃そつとつふ所に足込く寄う福を辨しての  
志のい酒配出たる上戸のおうし情を付する句之

煉掃の乃を大うてお出

むうひれ人と申ありたり

推量れ句こみせりふ中にれませくうのるも  
あつことまをうして申ありたりとありまを付する人

冬宜れおれはゆる山風

旅乃馳走り有ゆ

馳走の字さむを阿基よぬると心の志のりに馳亭  
のさひを付てあふ

けりおく眺は餘もをゆる乃約

摩耶う高根よ雲のかくれふ

まく句の甚約よさまかけたる心の餘まやうの  
まて雲のかれると雲まかけてお句にいひかけて付する句之

歌よせある村松乃ま

有明のなりお鳥帽子若くうり



お白の身をうけて其白れ移ひは移りて付する白こ

身み己みもと引ひ起たされて恥はしき

髪かみあふくはる 羅らの 衣え

お白れ拵こしらの移りうつをひく付つする之の白しろは女めの辨わりある

牡丹ぼたんありくくく霞せここりり

耳みみよくよく妹い又また告つする部ぶ一一公こう

心こころとひく付つする白しろこ

あはれ風かぜれれ糸いとをここはる浪なみの音ね

一一乃のりりももや 白しろ子こ乃のり 松まつ

お白の心の移りうつをみて気色きしきは歌うた一一付つするこ

鮠うなぎ乃のあふれ拵こしらと其その先まへ

帯おビ本もとはまうぬよよ生なてた蔵くらるるあり

お白に言いふはは倦うる白しろ分のぶんふふすす及およぶぶままうぬうぬ小こ蔵くらる

帯おビ本もととあれる宿しゆくを付つ取とりて

結むすゆゆ乃の七しち尾び乃の冬ふゆハハ住すうう記き

臭におの骨ほねふりふるるとと此この老らうを見て

お白れ亦または位ゐをを見み込こめとああるるきと心こころひひおおして人ひと

の辨わりあるるこ

中ちゆうここに土つち間まははままりりれれハハ春はるははか

わわるる名なもも里さとははあありりおおこ



月一付拾三

抱込く松山廣き有明り

あふ人毎は負くささるり

日一付之換村あふ地地と見込その亦といふ人乃  
神又さひ形して付歌はる

四又人通る傍も果之

世菊は町の子古の籠古能

あふ此外通る神内肉の神々付る之あふ此位を  
ひふして赤良のりみいつけなう付る之

此は上下の流此度る

腰は杖さし宿乃氣遠し

あふをさ遠し移ひを以詞と五形して付る之  
宛の字ぬくはゆ

所局姑里下りしてハ後くみ

ぬつと管よりおの出し入

はもあまつさきまを並ぶるもあふ付る句形り  
さひ形るにさわきほもあるささるをさし入

隣へも志くさし嫁をつきて来

屏風乃陰よ見ゆ菓子色

日一付之を此目よ意味あふもあふして付る句之



心の付ふ一筋あり

入道は流石の浦湯の夕まれ

中ふもせふれさうい山ゆ

あ句ふはまりて付る句こ中れりを目よ立て  
いひる句なり

人まの仲よ何を唱やん

嵐を舟をさしるあうき

この句さ一先ハ流石の嵐舟をさしるをさしひを  
られ付るよあ句のまよとあ字差合て付るれ  
句之曉の字骨折あま人のいさく流石の嵐新まよ

に付まとも舟さしるをさしひて下の七太もおれ  
うととり原はて宜とつま

板の本あし一此豆かを吹

きき炉に位持さひより扱む

は句さ一あ位持さし一とあし後淋の字除れ

相の本さく月さむる

門志免てたすつて痛る面白さ

この事先師のいさくまを儀ハ門志免ての一句を板を  
まへり試す方ハ門人あしハ皆位するのひそくにあ  
一あさ芽生といふ句よよれ星老師のあふあま非と



もくぬやとくわの時よまよ此中  
火をうり喜よ冬のをくひす

一年は仕りきるなよおさまりて

は舟三毛のあて此句之十余句并いけりかてわら  
是よ交せしれしとこ

市人よいよ是うらん言はさ

酒の戸たたく鞭のうれ梅

船うやり先うり母衣を引つて

は舟三毛門人杜園う句之は舟三毛と人くさぬくひ  
出侍るよ時のおもくは舟三毛の附くあまこあうへん

鞭ふてほ座をたくとつふまのハ風狂の詩人なるは  
さも阿るまー枯梅の風流よあひ入るハ武者のあまは  
舟三毛あへんはとこ

歩りあへん杖つき坂を落るが

角此とわぬ牛もあるもの

此句三毛門人土芳う句之先師は句を風と侍り季  
形一皆揃へて見るべしと阿りおのくさぬくつけて見  
侍れもあはれまのうへんそふとは句を見を侍れよ  
後一とてその侍りて侍れ侍る時のお味あへん



赤

九  
八



